地元のプロ・スポーツチームを応援する住民が持つ地域意識 ——地域的愛着と拡大意識に注目して——

Residents' Support for Local Professional Sports Teams and Community Consciousness:

A Focus on Place Attachment and Expanded Ego

木 村 宏 人
KIMURA Hiroto

This paper examines whether residents' support for their local professional sports teams has an impact on their community consciousness. We focus on two types of consciousness. One is place attachment to the regional community, and the other is expanded ego, which represents one's identity with the locality and the instinct for self-preservation from those beyond the bounds of the community. We conducted a social survey of residents ($N=1000$) of northwestern Chiba in 2018. Through multivariate analysis, we found that fans are likely to have a stronger attachment and ego than non-fans. This result implies that supporting local teams has a possible impact on the relationship between residents and the regional community.

1. 問いの設定

文部科学省は、第2期スポーツ基本計画（2017～2021年度）を定めている。この計画では、スポーツを通じた地域活性化が目標の1つとして掲げられており、「地元スポーツチームの観戦・応援などにより、スポーツによる地域一体感の醸成と非常時にも支え合える地域コミュニティの維持・再生を促進する」[文部科学省 2017: 23] という施策が定められている。この施策では、地域コミュニティをつくる主体として住民がとらえられており、住民どうしが支え合える地域コミュニティの形成に向け、スポーツ応援を通して地域に関する住民の意識が変わっていくことが期待されている。では実際、地元スポーツチームの応援と住民の地域意識の間に関連はあるのだろうか。本稿では、量的調査を通し、住民のスポーツ応援と地域意識の関連を実証的に明らかにする。

住民の地域的移動が多く流動性の高い都市部では、安定的な地域コミュニティの形成は難しいといわれる [三浦 1991]。そこで本稿では、地元のスポーツチームの中でも、都市部に拠点を置くプロ・スポーツ、中でもプロ野球、Jリーグ（サッカー）、Bリーグ（バスケットボール）のチームに焦点を当てる。JリーグとBリーグではリーグ全体の方針として、プロ野球では一部のチームごとに、ホームタウンを設定してチーム名にその地域名を冠し、積極的に地域振興を行うなど、地域に根差したチーム運営を行っている⁽¹⁾。

流動性の高い都市部で地域に密着した運営を行っている地元のプロ・スポーツチームを応援する住民は、自身が住んでいる地域に関してどのような意識を持つのか。次章では、コミュニティ研究とスポーツ社会学の先行研究から本稿の視座を示す。

2. 先行研究

(1) 地域的愛着への注目

1) 愛着と地域コミュニティ

はじめに、コミュニティ研究の視点から、地域的愛着に注目する。地域的愛着は、「地域にたいして愛着のない者に、地域をよくする意識を期待することはできない」[鈴木 1978: 15]といわれるように、地域の改善に結びつくといわれる意識である⁽²⁾。経験的にも、小林・堀川 [1996] は、北海道のある高校の同窓会名簿から首都圏に移住した男性を調査したデータを用いて、定着意志（「この町にずっと住んでいよう」）にかかわらず地域的愛着（「この町が好きだ」）が地域活動意欲（「この町を良くしよう」）に結び付くことを明らかにした。たとえ転入経験があり定住の意思のない流動層の住民であっても、地域的愛着を持つことによって地域をよくする活動に自ら加わることが示唆されている。小林は、「集団や社会への愛着は自発的な公共的活動を生み出す」⁽³⁾[小林 2012: 10]とし、スポーツ観戦における会場での高揚がその集団への愛着を高めるだろうとも予想する。はたして地元のプロ・スポーツチームを応援する住民は、地域的愛着を持つのだろうか。

2) 応援と愛着

プロ・スポーツチームの応援と地域的愛着⁽⁴⁾の間に関連があることは、統計的にいくらか明らかにされている[藤本ら 2012, 2013; 菅ら 2017, 2018; 二宮 2010]。しかし、本稿の関心に照らすと、これらの研究にはデータにいくつかの課題がある。第1に、藤本ら [2012, 2013] や二宮 [2010] は、チームのファンを調査対象としている。このデータでは応援する者どうしを比べる分析が行われ、地域住民の中で、応援する者と応援しない者を比較することができない。第2に、菅ら [2017, 2018] は、広く地域住民を調査対象とするが、調査会社の登録モニターをケースとするデータを用いている。このような有意抽出で得られたデータでは、サンプリングの偏りが分析に与える影響を拭えない。そこで本稿では、調査対象をホームタウンの地域住民とし、住民の中で応援する者と応援しない者を比較する分析を行う。そしてその分析には、地域住民を母集団とするランダムサンプリングで得られた社会調査データを用いる。

(2) 拡大意識への注目

1) 防衛的な一体化

プロ・スポーツチームを応援する住民が持つ意識の2つ目として、スポーツ社会学の視点から拡大意識に注目する。松田 [1997] によれば、スポーツファンの体験には、拡大体験につながるものがある⁽⁵⁾。拡大体験とは、作田 [1993, 1995] によると、自己が所属している集団（家族、コミュニティ、民族、国家など）と自己防衛的に一体化する体験であり、その集団の外部には他者が敵として潜在しているという特徴を持つ。作田は、集団の中で、規範を受容し社会化されていく過程を自己の境界が所属集団の範囲に広がっていくこととしてとらえる。自己が拡大して集団に一体化しているとき、自己は規範を共有する集団内部の人々からは支持され保護されるが、その外部には一体化していない他者が潜在的な敵として存在しているという。例えば松田 [1997] は、戦後、戦勝国アメリカのレスラーを次々と倒す力道山や、「フジヤマのトビウオ」と呼ばれた水泳の古橋広之進に熱狂していた人々は、日本という国家に自己を拡大していたという。

スポーツ応援が拡大体験につながるとすると、地元のプロ・スポーツチームを応援する

住民は、防衛的に自己が地域と一体化した意識（以下、拡大意識）を持つことが想定される。拡大意識は、自己の防衛を原理とした地域との一体化を表すため、地域意識ではあるものの、地域における自己についての意識ともとらえられる。地元のプロ・スポーツチームを応援する住民は、拡大意識を持つのだろうか。

2) 応援と地域、自己

プロ・スポーツチームの応援と拡大意識の関連について計量的に分析した研究は管見の限り見当たらない。しかし、スポーツ社会学の質的な調査研究には、プロ・スポーツチームの応援を自己と地域の内面的な関係からとらえているものがある。杉本〔2006〕は、甲子園球場で定形の応援パフォーマンスを行う阪神タイガースのファンについて分析している。居合わせた観客どうし、大阪文化を色濃く反映する応援行為を通して互いに相手を自己の世界に包摂し、大阪の文化である「じぶん」（自己＝相手）として一体化することで、都市生活の孤独から救われているのだという。また高橋〔2011〕は、広島出身の大阪居住者で組織された近畿広島県人会を母体として発足した近畿カーブ応援会について分析している。その成員は、試合という競争の中で広島としての凝集性を高め、故郷広島のアイデンティティを確認するとともに移住先の孤独を解消していたという。

このように、拡大意識が明確に調査されているわけではないが、生活する／していた地域における内面的な自己のあり方という観点で、スポーツにおける応援行為を分析する研究はなされている。地元プロ・スポーツチームの応援と拡大意識の関連を計量的に明らかにすることは、これらのスポーツ社会学の質的研究と並んで、プロ・スポーツチームの応援が内面的な自己と地域の関係に作用することを実証的に示す。

(3) 愛着と拡大の差異——スポーツ応援の2つの側面

地域的愛着と拡大意識という2つの意識は概念として異なる。地域的愛着は、拡大意識のように自己と地域の一体化を前提とせず、地域の外部に潜在的な敵を想定してもいないからだ。小林〔2012〕によると、愛着は論理的には集団への愛着と自己への愛着に分かれる。そして、公共的活動と結びつくのは集団への愛着であり、地域的愛着は集団への愛着に属するという。この点は、自己についての意識でもある拡大意識とは異なる。また小林によれば「自集団への愛着は必ずしも他集団への敵意を生み出すわけではない」〔小林 2012: 21〕。一体化した集団の外部に潜在的な敵を想定する拡大意識とはこの点でも異なる。

文部科学省がスポーツ基本計画において期待する「非常時にも支え合える地域コミュニティ」は、公共的活動に結びつくことされる地域的愛着と親和的であると考えられる。しかし、スポーツ社会学の視点に立てば、スポーツ応援は拡大意識とも結びつく。確かに拡大意識は自己と地域の一体化であり、ある種の「地域一体」的な意識といえるだろう。しかし、あくまで自己の防衛を原理とする拡大意識は、自己に危機が迫る災害時などの「非常時にも」他者を支えるような行動に必ずしも結びつかないかもしれない。以上の関心から、地域的愛着と拡大意識に注目し、スポーツ応援の2つの側面を実証的に明らかにする。

3. 方法

(1) データ

用いるデータは2018年9月から10月に千葉県北西部で実施された調査票調査「千葉北西部のライフスタイルに関する調査」のものである。この調査は千葉県北西部21市町⁽⁶⁾

に住む20歳から79歳の人々を母集団とし、住民基本台帳から層化2段無作為抽出により標本を抽出している。計2,500人に調査票を郵送し1,000票の有効票を回収した（有効回収率40.0%）。この調査の詳細については吉岡・木村〔2020〕を参照されたい。

調査対象地のある千葉県は全国的にみて人口移動が多く流動性が高い。たとえば、県間移動者数（転出入絶対値の合計）と県内市区町村間移動者数は人口あたりでみるとそれぞれ、全都道府県で2番目と9番目に多い。その中でもとくに北西部は、東京の郊外かつ県内の中心として人口とその移動が多くなっている⁽⁷⁾。

千葉県のプロ・スポーツに目を向けると、プロ野球、Jリーグ（2チーム）、Bリーグ合わせて4つものプロ・スポーツチームの拠点が置かれる。これは全都道府県で4番目に多い。そしてプロ野球のチームも含め、すべてのチームで地域に密着した運営が行われている。それぞれのホーム会場は千葉市（2会場）、船橋市、柏市にあり、調査対象地である千葉県北西部21市町はこの3市を含む。また他の18市町についても、すべての市町がいずれかのチームのホームタウンやそれに準ずるエリアとなっている⁽⁸⁾。表1には各チームの基本データ（調査時）を示した⁽⁹⁾。

このように千葉県北西部は、人口が多く流動的であり、かつ地域に密着したプロ・スポーツが盛んである。よって地元のプロ・スポーツチームの応援と地域意識の関連について調査するのに適しているといえるだろう。

表1 千葉県内に拠点を置くプロ・スポーツチームの基本データ（2018年）

	千葉ロッテ	柏レイソル	ジェフ千葉	千葉ジェッツ
ホーム会場 所在地・指定年	千葉市・1991	柏市・1986	千葉市・2005	船橋市・2016
リーグ戦年間試合数	143試合	34試合	42試合	60試合
2016(-17)～2018(-19) リーグ順位	3位, 6位, 5位 (/パ・リーグ6チーム)	8位, 4位, 17位 (/J1 18チーム)	11位, 6位, 14位 (/J2 22チーム)	3位, 1位, 1位 (/B1東6チーム)
2018(-19) 1試合あたり ホーム戦観客動員数	23, 127人	11, 402人	9, 858人	5, 204人

(2) 変数

1) 従属変数——地域意識

従属変数は、地域的愛着と拡大意識である。地域的愛着は、「現在お住まいの地域に、愛着を感じますか。それとも感じませんか」に対する回答を5件法で得点化した。拡大意識については、鈴木広を中心としたCommunity Morale and Mobility調査（コミュニティ・モラルと社会移動の研究）で用いられたコミュニティ意識を参考に概念を操作化した。コミュニティ意識の中の「同一視」の項目のワーディング〔鈴木 1978: 442〕を修正して用いている。実際に使用した質問文は「今住んでいる地域の悪口をいわれたら、何か自分の悪口をいわれたような気になる」であり、5件法で得点化した。

防衛的な自己と地域との一体化を表す拡大意識について、その操作化の妥当性を述べる。まず、居住地域についていわれたことを自分のこととみなすワーディングになっている。このことは、自己と地域が一体化している状態にあることを表し、この質問を地域における自己の意識について尋ねるものにする。またこの質問では、悪口をいう者といわれる居住地域＝自己という構図になっている。このことは、単に自己が地域と一体化しているだけではなく、地域の外部に一体化していない他者がおり、その他者からの悪口に防衛

的に反応していることを表す。この質問に肯定的に回答する人は、自己防衛的に地域の外部に「われわれ」には含まれない他者を想定していると考えられる。なお、地域的愛着の質問文については、愛着は地域に対する意識のため自己については触れられず、愛着自体では集団外部への敵意を伴わないので地域の外部の他者も登場しない。

2) 独立変数——応援の有無

独立変数は地元プロ・スポーツチームの応援である。まず、「プロ野球またはJリーグ、もしくはBリーグでは、千葉県に拠点を置くチームを応援する」という質問項目に対して、肯定的に回答した人を「応援あり」とし、「どちらともいえない」および否定的に回答した人を「応援なし」とする。そしてさらに、応援ありの人について、「プロ野球またはJリーグ、もしくはBリーグの試合を、試合会場で観戦する」という質問項目の回答を用いて2分化する。すなわち、ここ数年で1回以上観戦に行ったことがある人を「応援あり観戦あり」とし、ここ数年で1回も会場で観戦していない人を「応援あり観戦なし」とした。

応援についての質問項目を作成するにあたって、チームごと、あるいは種目ごとに応援しているかどうかを尋ねることも考えられる。しかし、本稿は応援しているチームや種目ごとにファンの地域意識を比較することを目的としているわけではない。チームや種目を問わず地元のプロ・スポーツチームを応援しているか否かで、住民の地域意識が異なるのかどうかを明らかにすることに関心を持つ。そのため、千葉県に拠点を置くプロ・スポーツチームのどれか1つでも応援しているかどうかを尋ねる質問項目とした。具体的には各リーグ名をあげ、その際に「または」や「もしくは」と表現することで、どれか1つでも応援していれば「応援あり」になるようにした。

観戦の有無による応援ありの人の2分化は、Kenyon [1969=1988] に基づく。Kenyonは、実際に試合会場で観戦する直接的な参与と、メディアを通す間接的な参与を分けた。本稿の先行研究〔藤本ら 2012, 2013; 菅ら 2017, 2018; 二宮 2010; 杉本 2006; 高橋 2011〕では、おもに直接的な観戦者が想定されている。しかし、現代のプロ・スポーツとメディアの関係から考えると、新聞や雑誌、テレビ、インターネットなど間接的な参与の仕方は広く開かれている。地域住民を調査対象とする本稿では間接的にのみ応援する住民にも注目する。

3) 統制変数

統制変数は住民の地域的属性にかかわる地域変数とその他の基本的な変数を用いる。地域変数は、出身県（中学卒業時の居住地が千葉県内か否かのダミー変数）、居住歴（現在住む市町の居住年数）、居住地域（ホーム会場所在地である千葉市・船橋市・柏市か否かのダミー変数）である。その他の基本的変数については表2を参照されたい。重みつき財産得点は、持ち家を除いた13個の耐久消費財について、希少な財を所有しているほど点数が高くなるように分析に用いるケースにおける所持率の逆数を得点化して合計したものである。

分析に用いるケースは893ケースであり、使用する変数に欠損値のあるケースを除いた。回答者の基本的属性として、やや女性が多く平均年齢は約51歳である。また、平均居住年数は約26年で県外出身者が半数以上おり、人口移動の多さが表れている。そして応援する者は全体の約35%で、応援はするが観戦には行かない者は約15%である。スポーツ応援がマイナーな活動ではなく、生観戦はせずとも応援している住民も少なくないことがわかる。

表2 記述統計量

変数	平均値 /比率	標準偏差	変数	平均値 /比率	標準偏差
地域的愛着	4.046	0.933	男性ダミー	0.449	
拡大意識	2.987	1.233	女性ダミー	0.551	
応援ありダミー	0.352		年齢	51.330	16.089
応援あり観戦ありダミー	0.196		既婚ダミー	0.711	
応援あり観戦なしダミー	0.156		離死別ダミー	0.097	
応援なしダミー	0.648		未婚ダミー	0.192	
千葉県出身ダミー	0.467		教育年数	13.863	2.124
県外出身ダミー	0.533		正規ダミー	0.359	
居住年数	25.772	17.308	非正規ダミー	0.253	
ホーム会場所在地ダミー	0.424		経営・自営ダミー※1	0.096	
非所在地ダミー	0.576		無職・学生ダミー	0.291	
			重みつき財産得点	13.000	6.079

n=893

※1 家族従業者を含む

図1 応援の有無別の地域的愛着

図2 応援の有無別の拡大意識

4. 結果

(1) 2変数間の関連

まず第1に、独立変数と従属変数の2変数間の関連をみるため、地域意識の回答を3値にし、応援ありと応援なしで比べたクロス表を帯グラフで示した(図1、図2)。地域的愛着を(どちらかといえば)感じる者は全体では約80.3%だが、統計的に有意に、応援しているほど地域的愛着を持つ($Cramer's V=0.134, p<0.01$)。また拡大意識を問う質問に(やや)そう思うと回答した者は全体では約41.8%で、応援しているほど拡大意識を持つ($Cramer's V=0.160, p<0.01$)。地域的愛着と拡大意識で分布は異なるが、両方とも応援している方が地域意識を持つ傾向にある。

また、相関分析の結果、地域的愛着と拡大意識についての相関が認められる(相関係数 $r=0.396, p<0.01$)。この相関は、概念的に異なると整理した両意識が、経験的には重なりをみせていることを意味する。そのためスポーツ応援と地域的愛着の関連、そしてスポーツ応援と拡大意識の関連を個別に分析するだけでなく、それぞれの関連が「独立して」主張できるかを分析する必要がある。そこで続く重回帰分析では、一方の地域意識を従属変数とするモデルにおいて、もう一方の地域意識を独立変数に加えた。重回帰分析のモデルにおいて、ある独立変数の効果が統計的に有意である場合、その独立変数は、他の変数の値にかかわらず、従属変数と関連を持つと主張できる。よってたとえば、地域的愛着を従

属変数とするモデルにおいて、独立変数としてスポーツ応援と拡大意識を投入し、スポーツ応援の効果が有意であるならば、スポーツ応援と地域的愛着の関連が、スポーツ応援と拡大意識の関連とは「独立して」成立していると主張できる⁽¹⁰⁾。

(2) 重回帰分析

表3 応援・観戦の有無と地域意識の重回帰分析

	地域的愛着		拡大意識		地域的愛着		拡大意識	
	B	s. e.	B	s. e.	B	s. e.	B	s. e.
(定数)	3.129	0.263 **	0.103	0.381	3.132	0.263 **	0.104	0.381
応援ありダミー※1	0.171	0.061 **	0.231	0.081 **				
応援あり観戦ありダミー※1					0.147	0.074 *	0.225	0.099 *
応援あり観戦なしダミー※1					0.202	0.081 *	0.238	0.109 *
千葉県出身ダミー※2	-0.054	0.070	0.067	0.095	-0.054	0.070	0.067	0.095
居住年数	0.013	0.002 **	-0.004	0.003	0.013	0.002 **	-0.004	0.003
ホーム会場所在地ダミー※3	-0.113	0.057	0.060	0.077	-0.112	0.057	0.060	0.077
男性ダミー※4	0.092	0.062	-0.112	0.084	0.095	0.062	-0.111	0.084
年齢	-0.007	0.003 *	0.010	0.004 *	-0.007	0.003 *	0.010	0.004 *
離死別ダミー※5	-0.100	0.099	-0.026	0.133	-0.101	0.099	-0.026	0.133
未婚ダミー※5	-0.026	0.085	-0.100	0.115	-0.026	0.085	-0.100	0.115
教育年数	0.002	0.014	0.022	0.019	0.002	0.014	0.022	0.019
非正規ダミー※6	-0.021	0.081	0.111	0.108	-0.019	0.081	0.112	0.108
経営・自営ダミー※6	-0.095	0.107	-0.058	0.144	-0.092	0.107	-0.058	0.144
無職・学生ダミー※6	-0.106	0.083	-0.040	0.111	-0.107	0.083	-0.040	0.111
重みつき財産得点	0.008	0.005	0.005	0.007	0.008	0.005	0.005	0.007
地域的愛着			0.505	0.042 **			0.505	0.042 **
拡大意識	0.280	0.023 **			0.282	0.023 **		
調整済み R ²	0.198		0.170		0.197		0.169	

n=893 Bは非標準化係数, s. e. は標準誤差を示す。

**p < 0.01, *p < 0.05

※1 ref. 応援なしダミー, ※2 ref. 県外出身ダミー, ※3 ref. 非所在地ダミー, ※4 ref. 女性ダミー,

※5 ref. 既婚ダミー, ※6 ref. 正規ダミー

重回帰分析の結果を表3に示す。合計で4つのモデルを記載している。左2つのモデルは、応援の有無と地域意識の関連について分析した結果である。右2つは、応援ありを直接観戦の有無で分け、直接の観戦を伴わない応援でも地域意識と関連があるのかを分析した結果である。なお、年齢と居住歴など、変数間の多重共線性は確認されなかった。

1) 応援の有無と地域意識

左2つのモデルをみると、地域的愛着を従属変数としたモデルと、拡大意識を従属変数としたモデルの両方で、応援ありダミーが1%水準で統計的に有意である。よって、千葉県内に拠点を置くプロ・スポーツチームを応援する住民は、応援しない住民に比べて、地域に愛着を感じる傾向にある。このことは、出身県や居住年数、居住地域などにかかわらず、そして拡大意識を持つかどうかにもかわらない。拡大意識を持つ傾向にあることも同様である。つまり、スポーツ応援と地域的愛着の関連と、スポーツ応援と拡大意識の関

連は独立して成り立っていると主張できる。

2) 直接観戦の有無と地域意識

右2つのモデルをみると、地域的愛着を従属変数としたモデル、拡大意識を従属変数としたモデルの両方で、応援あり観戦ありダミー、応援あり観戦なしダミーが5%水準で統計的に有意である。したがって、地元のプロ・スポーツチームを応援し、かつ実際に会場に足を運んでいる住民だけでなく、会場には行かずに応援する住民であっても、応援しない住民より地域的愛着や拡大意識を持つ傾向にあるといえる。

5. 考察

(1) 意義と課題

本稿では、地元のプロ・スポーツチームを応援する住民がどのような地域意識を持つのか、地域的愛着と拡大意識に注目し、流動性の高い千葉県北西部を対象とした社会調査データを用いて分析した。分析にあたっては、会場で直接の観戦はしないが応援はする住民にも注目した。結論は、直接の観戦の有無や、出身県や居住歴、居住地域にかかわらず、地元のプロ・スポーツチームを応援する住民は、地域的愛着を持ち、かつ、この関連とは独立して、拡大意識を持つ、となる。

本稿の意義としては、まず、先行研究でいわれていたスポーツチームの応援と地域的愛着の関連について、流動的なエリアにおいて、ランダムサンプリングの社会調査データを用いた多変量解析により追試したことがあげられる。そしてさらに、地域的愛着だけでなく自己防衛的な拡大意識とも関連するという、スポーツ応援の2つの側面を新たに示した。この2つの側面が地域コミュニティにもたらす影響については次節でくわしく議論する。

本稿の課題としては、スポーツ応援と地域意識の因果の向きが明らかになっていないことがあげられる。本稿では、スポーツ応援を独立変数、地域意識を従属変数にして分析を行ったが、時間的順序として地域意識が応援に先行している可能性もあり、実際の因果の向きまでは特定できていない。菅ら〔2018〕は縦断的な調査を行い、この問題に取り組んでいる。しかし、ランダムサンプリングのデータを用いているわけではなく、拡大意識についての検証はない。スポーツ基本計画がいうように、地元スポーツチームの応援によって住民の意識が変わると明確に結論づけるには、地域住民を対象としたパネル調査を用いたより精緻な因果関係の分析を行う必要がある。また、本稿では都市部における地域密着の運営という点からプロ・スポーツに注目し、3つの種目をひとまとめにして分析した。しかし各種目で競技特性、リーグとしての構造と歴史、あるいはファン層が異なる可能性があり、それによって地域意識に差が出るという仮説も立てられるかもしれない。種目ごとにファンを分けた分析も今後検討したい。

(2) 含意

Bauman〔2000=2001〕によれば、個人化・流動化が進む現代において、安定した所与のコミュニティは衰退するという。もしそうであるならば、地域コミュニティ自体、現代において意義を失うと考えられるかもしれない。しかし、ある地域に実際に住みそこで生活する以上、そこでの住民間の利害調整や共通の問題への対処は必要である。近年自治体の行政サービスが縮小する中で、地域コミュニティや「地域から生まれる公共性」〔田中2010〕が果たす役割の実態を分析することは重要であろう。また、災害など、個人では解

決できず、行政だけでは対処し切れない問題や、その問題がリスクとなって生じさせる不安に対し、地域コミュニティが果たす役割もあるだろう [山下 2008]。

このような中で、「地元スポーツチームの観戦・応援などにより、スポーツによる地域一体感の醸成と非常時にも支え合える地域コミュニティの維持・再生を促進する」[文部科学省 2017: 23]とするスポーツ基本計画は、非常時も含め、支え合える地域コミュニティにスポーツ応援が寄与することを期待するものにとらえられる。本稿では、地元のプロ・スポーツチームの応援が住民の地域的愛着や拡大意識と関連を持つことを実証的に明らかにした。それでは、これらの地域意識は地域コミュニティに何をもたらすのだろうか。分析の範囲を超え確定的なことはいえないが、非常時も視野に入れて考察してみたい。

まず地域的愛着については、コミュニティ研究において地域活動意欲を促すことが示されており、日常的には地域コミュニティにおける公共的活動に結び付くと考えられる [小林 2012; 小林・堀川 1996]。また Anderson [1991=2007] は、戦争に行く兵士であっても、愛着は他者への恐怖と憎悪には根差さず、しばしば自己犠牲的なものとして呼び起こされると述べる。よって、地域的愛着は、スポーツ基本計画における「非常時にも支え合える地域コミュニティ」に結び付くといえるかもしれない。

一方、拡大意識についてはどうだろうか。確かに、拡大意識も住民どうし規範を共有させ、安定的な地域コミュニティにつながるかもしれない。しかし一方で「非常時にも」必ずそうであるとは言いきれない。というのも、自己の拡大について論じた作田にしたがえば、自己の無力感や孤独感を強く仮定した場合、自己の集団との一体化は権威主義的性格に結び付き、拡大ナルシズムをもたらしることがあるからだ。拡大ナルシズムのもとで集団の内部が充実するには、外敵への憎悪と攻撃を伴わなければならないという [作田 1993: 195]。そして、ナルシズムについて論じた Sennett [1977=1991] によれば、異質な他者を排除し、コミュニティの外部に対する感情によって集団＝自己の存在が規定されているとき、人々は集団の内部でも互いを監視するようになるという。このときたとえ同じコミュニティに住んでいても、同じ感情を持たなければ、裏切り者とされるのである。拡大意識は、災害時など、人々の無力感や孤独感が引き起こされる非常時に、人々の支え合いにつながるよりむしろ、人々を排外的で不和なものにしてしまうかもしれない⁽¹⁾。

地元プロ・スポーツチームの応援は、住民と地域コミュニティの関係に少なくとも2つの側面で影響を与える可能性が示唆された。地域コミュニティにおける支え合いに資する面と、必ずしもそうではない面である。しかしこれらの含意については実証的に明らかにされたわけではなく、引き続き検討したい。

付記

本研究は、JSPS 科研費 (17H02586) の助成を受けたものです。

註

- (1) Jリーグ公式サイト (2019年11月9日取得、<https://www.jleague.jp/aboutj/transition/>)、Bリーグ規約 (2019年11月9日取得、<https://www.bleague.jp/about/pdf/r-02.pdf>)、千葉ロッテマリーンズ公式サイト (2019年11月9日取得、<https://www.marines.co.jp/expansion/local/>)などを参照した。
- (2) 本稿における地域と地域コミュニティが指し示す内容について述べておきたい。本稿では地域を、住居を中心として人々が生活を営む土地としてとらえる。そして、コミュニティを「モノ (自然的、人

為的)・ヒト(組織体、個人)・ココロの三つのたがいに関連する次元をもち、私生活、近隣、もろもろの地域社会、国、といういくつかのレベルに重層的にかかわる社会生活のあり方」[鈴木 1978: 144]とし、「もろもろの地域社会」を地域コミュニティと考える。したがって本稿では、コミュニティという語自体に「積極的・肯定的意味あい」[奥田 1983: 24]を持たせることはせず、また、自治会・町内会などのある特定の住民組織のことを指して地域コミュニティと呼ぶわけではないものとする。

- (3) 本稿では、スポーツ基本計画や小林[2012]を引き、地域意識が地域コミュニティや公共的活動に影響すると考えられていることに言及しているが、地域コミュニティと公共的活動の関係について述べておく。田中[2010]によると、地域社会は共同性を特徴に持つが、その共同性は社会の内部で閉じられたものとしてイメージされ、公共性は広く開かれたものとイメージされる。それゆえに共同性と公共性は同時には成立しえないものとされやすい。しかし田中は、それらは矛盾せず、地域社会において公共性が成立しようと論じる。すなわち、地域には共に暮らすことに伴う「場の共同性」があり、その共同性が自覚され、共同課題の解決を支えるものとしての公共性が成り立つとする。小林[2012]のいう公共的活動は、自己の所属する集団や社会を、その集団や社会にとってよい状態に導くための人々の活動である。田中の視点に立てば、共同性を特徴とする地域コミュニティにおける公共的活動というものもまた成立しうるだろう。よって本稿では、地域コミュニティと公共的活動の双方にとって重要な住民の地域意識というものが想定可能であると考ええる。
- (4) 先行研究によっては「地域愛着」と表記される場合もあるが、本稿では小林・堀川[1996]の表記に合わせ「地域的愛着」に統一した。
- (5) 正確には松田[1997]は、チームではなく、プレイヤーへの同一化としての応援が拡大体験につながるとしている。プレイヤーへの同一化としての応援とは、競争と運の希少な成功者であるスターに同一化することで代理的に勝利や名誉を得ようとするものである[Caillois 1958=1990]。しかし、ファンは選手やチームなど対象に関係なく自己を同一化する[平井 1997]。また拡大体験において受容する規範は非人格的で匿名的なものであり、その規範を遵守するときに特定の誰かを想起するようなものではない[作田 1993: 113]。よって、自己が拡大するとき、必ずしも同一化して規範を受容する対象が個人である必要はないと考えられる。そこで本稿ではプレイヤーに限らず、チームへの同一化としての応援であっても拡大体験につながるとする。
- (6) 千葉県北西部の21市町とは、千葉県地域振興事務所区分(県内11区分)のうち、東葛飾地域振興事務所が管轄する6自治体(野田市、流山市、松戸市、柏市、我孫子市、鎌ヶ谷市)、葛南地域振興事務所が管轄する5自治体(浦安市、市川市、船橋市、習志野市、八千代市)、印旛地域振興事務所が管轄する9自治体(白井市、印西市、栄町、成田市、佐倉市、四街道市、酒々井町、富里市、八街市)に、千葉市を加えた市町である。
- (7) 県間移動者数と県内移動者数は総務省統計局の住民基本台帳人口移動報告(2018年)を、千葉県北西部の人口とその移動は千葉県毎月常住人口調査(2018年)を参照した。
- (8) 千葉ロッテマリーンズは、千葉県全域をホームタウンとして、千葉市にホーム会場を置き、調査時には千葉市、柏市、船橋市、習志野市、浦安市、成田市、佐倉市、市原市、袖ヶ浦市、茂原市とフレンドシップシティ協定を結んでいる。柏レイソルは、柏市をホームタウンとして、ホーム会場も柏市に置き、周辺の松戸市、野田市、流山市、我孫子市、鎌ヶ谷市、印西市、白井市をホームタウンエリアとしている。ジェフユナイテッド市原・千葉は、市原市と千葉市をホームタウンとして、千葉市にホーム会場を置き、千葉県を活動地域としている。千葉ジェッツふなばしは、船橋市をホームタウン、千葉市をフレンドリータウンとして、ホーム会場を船橋市と千葉市に置いている(下線は調査対象外の市を示す)。
- (9) ここでの各チームの情報は、註(1)に加え、ジェフユナイテッド市原・千葉公式サイト(2019年11月9日取得、<https://jefunited.co.jp/profile/index.html>)、柏レイソル公式サイト(2019年11月9日取得、<https://www.reysol.co.jp/club/town/>)、千葉ジェッツふなばし公式サイト(2019年11月9日取得、<https://chibajets.jp/hometown/>)などを参照した。
- (10) 主要変数と地域変数との相関分析の結果についても述べておく。応援ありダミーおよび2つの地域意識はそれぞれ地域変数(出身県、居住歴、居住地域)のいくつかと有意な関連があった。よって、スポーツ応援と地域意識の関連は、住民の地域的属性による見せかけである可能性がある。この点につ

いて先行研究では、菅ら〔2017〕が居住年数についてのみ検討を行っているが、出身地や居住地域については検討しておらず、また他の研究〔藤本ら 2012, 2013; 菅ら 2018; 二宮 2010〕では検討されていない。住民の流動性に注目する本稿では、多変量解析において地域変数を統制変数として投入し、出身県や居住歴、居住地域にかかわらず、スポーツ応援が地域意識と関連を持つのかを分析する。

- (11) 災害社会学において、災害は時間的プロセスの中でとらえられる〔大矢根ら 2007 など〕。平時から災害へ、そして復旧・復興へと経過していく中で、どのような地域意識がどのように変化し、またそれがどのように地域コミュニティに作用するのかは、災害社会学においても重要な問いであろう。また拡大意識は、災害に限らず、都市への流入がもたらす無力感や孤独感によって拡大ナルシズムにつながり、地域コミュニティを不作法にするかもしれない。

文献

- Anderson, Benedict 1991 *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. revised edition. Verso. = 2007 白石隆・白石さや（訳）『定本想像の共同体——ナショナルイズムの起源と流行』書籍工房早山。
- Bauman, Zygmunt 2000 *Liquid Modernity*. Polity Press. = 2001 森田典正（訳）『リキッド・モダニティ——液状化する社会』大月書店。
- Caillois, Roger 1958 *Les Jeux et les Hommes: Le Masque et le Vertige*. édition revue et augmentée. Gallimard. = 1990 多田道太郎・塚崎幹夫（訳）『遊びと人間』講談社。
- 藤本淳也・原田宗彦・Jeffrey D. James 2013 「Jリーグクラブの「ファンづくり」と「まちづくり」の有機関係構築の検討——ファンのチーム・アイデンティティと地域意識のクラブ間比較分析から」『SSF スポーツ政策研究』2(1): 88-95.
- ・——・——・奥永憲治・梅本祥子 2012 「Jリーグクラブの「ファンづくり」が「まちづくり」に及ぼす影響に関する影響——ホームタウン住民のチーム・アイデンティティと地域意識に注目して」『SSF スポーツ政策研究』1(1): 160-167.
- 平井肇 1997 「スポーツファンのアイデンティティ——ローカルヒーロー、ナショナルスターからグローバルアイコンへ」杉本厚夫（編）『スポーツファンの社会学』世界思想社 pp. 27-50.
- 菅文彦・古川拓也・舟橋弘晃・間野義之 2017 「スポーツ観戦意図及び行動と地域愛着の関係分析——FC今治を事例として」『スポーツ産業学研究』27(3): 223-232.
- ・——・——・—— 2018 「チーム・アイデンティフィケーションと地域愛着の因果関係に関する考察——FC今治の本拠地（愛媛県今治市）の住民を対象として」『スポーツ産業学研究』28(1): 1-11.
- Kenyon, Gerald S. 1969 "Sports Involvement: A Conceptual Go and Some Consequences Thereof," Gerald S. Kenyon ed. *Aspects of Contemporary Sport Sociology*. the athletic Institute. pp. 77-100. = 日下裕弘（訳）1988 「スポーツとのかかわり合い——概念構築のための試論とその結果」糸野豊（編）『スポーツと文化・社会』ベースボール・マガジン社 pp. 57-66.
- 小林久高 2012 「公共性の精神的基盤」『社会分析』39: 7-24.
- ・堀川尚子 1996 「流動層のコミュニティ意識——その現実と可能性」『ソシオロジ』41(2): 55-73.
- 松田恵示 1997 「スポーツのファン体験と共同体の身体性」杉本厚夫（編）『スポーツファンの社会学』世界思想社 pp. 191-210.
- 三浦典子 1991 『流動型社会の研究』恒星社厚生閣。
- 文部科学省 2017 『第2期スポーツ基本計画』（2020年5月2日取得、https://www.mext.go.jp/sports/content/1383656_002.pdf）。
- 二宮浩彰 2010 「プロスポーツ・ファンの地域愛着とスポーツ観戦者行動」『スポーツ産業学研究』20(1): 97-107.
- 奥田道大 1983 『都市コミュニティの理論』東京大学出版会。
- 大矢根淳・浦野正樹・田中淳・吉井博明（編）2007 『災害社会学入門』弘文堂。
- 作田啓一 1993 『生成の社会学をめざして——価値観と性格』有斐閣。
- 1995 『三次元の人間——生成の思想を語る』行路社。

- Sennett, Richard 1977 *The Fall of Public Man*. Cambridge University Press. = 1991 北山克彦・高階悟（訳）『公共性の喪失』晶文社.
- 杉本厚夫 2006 「阪神タイガースファンにみる大阪文化——なぜ、350万人も甲子園球場に行くのか？」『フォーラム現代社会学』5: 69-76.
- 鈴木広（編）1978 『コミュニティ・モラルと社会移動の研究』アカデミア出版会.
- 高橋豪仁 2011 『スポーツ応援文化の社会学』世界思想社.
- 田中重好 2010 『地域から生まれる公共性——公共性と共同性の交点』ミネルヴァ書房.
- 山下祐介 2008 『リスク・コミュニティ論——環境社会史序説』弘文堂.
- 吉岡洋介・木村宏人 2020 「「千葉北西部のライフスタイルに関する調査」の概要と基礎分析」『人文公共学研究論集』40: 216-226.

（千葉大学大学院人文公共学府博士前期課程 kmrhrt.u@gmail.com）